標識データからみた北海道亀田郡七飯町の 休耕田を通過する鳥類

田中正彦・三上かつら*

北海道の渡島半島にある七飯町の休耕田において、1990年から2014年までの間に、標識調査で捕獲された鳥類について報告する。この期間中に、のべ37,868羽、108種が放鳥された。放鳥数が多かった鳥類種は、上位から、オオジュリン、カシラダカ、アオジ、ツバメであった。本調査地の特徴として、秋季のカシラダカ放鳥数が多いことと、オオジュリンの回収にかかわる記録が多いことが挙げられる。カシラダカは、七飯町を含む渡島半島で秋季には多く見られることから、音声誘引と地形的要因が集中を強化したものと思われる。オオジュリンは、秋季・春季ともに当地で数多く捕獲され、181個体が当地で放鳥され他地域で回収された、359個体が他地域で放鳥され当地で回収された。本調査地を通過するオオジュリンを地図上に可視化させると、初放鳥または再捕獲地点は日本海側・太平洋側を問わず日本全国（一部国外も含む）に及んでいた。七飯町は、日本のオオジュリンにとって、重要な渡りの中継地のひとつとなっていると考えられる。ツバメとショウドウツバメは当地を夏のねぐらとして利用していた。

キーワード：オオジュリン、回収、カシラダカ、七飯町、標識、北海道。

は じ め に

春や秋の渡りの季節になると、渡島半島やその周辺には、大小さまざまな鳥の群れが数多く集まり、秋には北から南へ、春には南から北へと渡る様子が観察される。これは渡島半島が北海道の南端にあり、陸域が細くなっているため、通過する鳥類が集中するという地形条件や、ユーラシア大陸の東端からの距離および、渡島半島から津軽海峡を挟んで本州までの距離も近い（津軽海峡は最短でおよそ17.5 km）という位置条件が関係していると思われる。多くの人が、その面白さを日常的な観察から経験的に感じている。また渡島半島の鳥類標識調査（鳥を捕獲し、連番の数字が刻印された金属製足環を装着して放し、それが再捕獲されることでその鳥の渡りや寿命等の情報を得る調査、足環を装着して個体識別することを標識と呼ぶ）の拠点である松前白神2級ステーションや、函館山での調査結果からも、そのことがうかがえる。たとえば、2014年の松前白神2級ステーションにおける8月～11月の標識種数は62種にもほのぼの（山階鳥類研究所 2016）し、函館山ではルリビタキ *Tarsiger cyanurus*、キクイタダキ *Regulus regulus* をはじめとするスズメ目にくわえ、フクロウ目なども全国的にみても多く標識されている（佐藤 1994a, 1994b）。これらの標識調査地は、岬や、海に面した山に位置している。一方で、日本国内では多くの標識調査地が湿地・高茎草地環境に設けられているため、渡島半島内の高茎草地環境においても標識調査を行うことで、調査地内外からの多くの再捕獲記録、またその記録からの知見が得られると期待できる。

今回、渡島半島内に位置する七飯町の休耕田において標識および再捕獲された鳥類の記録を整理す

* 責任著者 Corresponding author

ることで、渡島半島の高茎草地環境を渡りの中継地として利用する鳥類について、その渡り生態の一端を知ることができたので、ここに報告する。

調査地と方法

標識個体は、放鳥（標識した鳥を放すこと）した年月日と場所、種名、年齢、性別にくわえ、再捕獲された場合には鳥類標識マニュアル（山階鳥類研究所 2009）で定義されるところの Rp（リピート：同一調査地で 6 ヶ月未満の間に同じ個体が複数回、再捕獲された場合）、Rt（リターン：6 ヶ月以上経過した後同一個体が複数回再捕獲される場合の初回）、Rc（リカバリ：放鳥地から 5 km 以上離れた地点で再捕獲された場合）の情報を記録する。そこで本稿における再捕獲個体については、これらの情報をもとに整理を行い、以降の記述については、Rp, Rt, Rc の表記を用いた。また、標識個体が再捕獲された場合、Rp, Rt, Rc すべてを含む集合に対し“回収”の語を用いた。

放鳥実績の解析対象とした調査地は、北海道亀田郡七飯町の飯田町および藤城の 2 地区である。七飯町は、函館市の北隣に位置し、標識調査の拠点として長期間の実績がある松前白神 2 級ステーションからは北東方向に約 70 km 離れている。調査地は、東西を山地に囲まれた、盆地状の大野平野内の水田地帯の一角にあり、網を設置した場所は、休耕田で、おもにヨシ *Phragmites australis* からなる高茎草地である。対象とした 2 地区の環境はよく似ており、互いに 2 km 程度しか離れていない。この距離は七飯町を通過する小鳥たちの動態や回収地について、日本国内およびその周辺というスケールでみるうえでは、ほとんど影響しないスケールだと考えられる。

解析対象期間は、飯田町が 1990 年から 2002 年、藤城地区が 2012 年から 2014 年で、期間中における総調査日数は 1,380 日であった。これら 2 地区の場所と調査年による影響をみるため、地区ごとの調査頻度について図 1 に示した。厳密ではないものの、月別の調査はともに 4～5 月と 9～10 月に高頻度に行っている。したがって、本稿では 2 地区のデータを合わせて解析した。

調査時間や調査に使用した網の枚数は一定ではなかった。主に 30 メッシュと 36 メッシュのかすみ網を最大 23 枚設置した。このほか、任意で中型～大型鳥類の捕獲を目的として、61 メッシュと 121 メッシュのかすみ網を最大 7 枚使用した。

捕獲調査の際には、音声による誘引を行った。誘引する音声として、ノゴマ *Luscinia calliope*、ホオジロ *Emberiza cioides*、アオジ *E. spodocephala*、カシラダカ *E. rustica* の鳴き声（さえずり）を用いた。音声誘引の設置箇所は調査地内で 1 箇所のみだった。ノゴマの音声は 9～10 月、ホオジロ類 3 種を混ぜた音声は 9 月～11 月、カシラダカの音声は 10 月上旬～11 月の間に使用した。したがって、当地での捕獲は完全なランダムサンプリングではないが、「少なくともこの種が多数、七飯町の休耕田を通過している」、「この鳥が七飯町と回収地を通過する」といったことはいえるだろう。また、調査努力量や、捕獲場所が厳密には一定ではないことから、年変動等の定量的な解析については行わなかった。

なお、これらのデータの使用には山階鳥類研究所の許諾（許可番号：山階保全第 27-105 号）を得た。図 5 のベースマップとして、地球地図第 2.1 版（2015 年公開、国土地理院 オンライン）を用いた。

図1. 飯田町（上）と藤城地区（下）での月別の調査日数。
Fig. 1. Number of survey days of each month at Iida (above) and Fujishiro (below).

結 果

1. 放鳥数

対象期間内に放鳥された鳥はのべ37,868羽、計108種であった。放鳥された種の一覧を付表に示した。秋の渡りの時期（8～11月）に最も多く放鳥されたのはカシラダカで、アオジ、ツバメ *Hirundo rustica*、オオジュリン *E. schoeniclus* がこれに続いた（図2a）。七飯町でカシラダカが放鳥されるのはほとんどが秋（図3）で、毎年平均495羽（最少～最多：2～1,215羽）が放鳥され、対象期間におけるのべ放鳥数は6,923羽であった。春の渡りの時期に突出して捕獲された種がオオジュリンであり、カシラダカとアオジは春の放鳥数は少なかった（図2b）。ただし、2013年の5月にはアオジ344羽が放鳥された（図3c）。ツバメとショウドウツバメ *Riparia riparia* は、夏季に、ねぐら入りする個体を標識しているので、図4のような8月を中心とした放鳥数分布となった。

2. Rc としての回収数

「調査地で放鳥された個体が他地域で Rc として回収された記録」または「他地域で放鳥された個体が調査地で Rc として回収された記録」はのべ598羽（複数回収を含む）であった。最も多く回収された種はオオジュリンで、その数は突出しており、のべ540羽（年間最少～最多：4～94羽）だった。

3. 記録数かつ回収数の多い種の記録からわかる傾向

放鳥数の多かった、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、ツバメ、および、のべ放鳥数は6番目だったがツバメとともに晩夏にねぐらをとっていたショウドウツバメについて、以下に詳細を述べる。カワラヒワの放鳥数は多かったものの回収数が少なく、同じ大野平野内にあった別の網場（七飯町飯田町、函館市桔梗、北斗市南大野）の間を行き来した 10 km 以内の Rc が5羽あるのみで、遠距離で Rc

図2. 1990年から2014年におけるのべ放鳥った鳥類種の上位20. a) 8月～11月, b) 3月～6月.

Fig. 2. Total number of top 20 birds captured, a) August to November, b) March to June from 1990 to 2014.

として回収された記録はなかった.

カシラダカ

他地域または本調査地で Rc として回収されたカシラダカの個体数は少なく、それぞれ5羽と2羽(当地の全カシラダカ放鳥数の0.1%以下)にとどまった. 七飯町で放鳥された個体の回収地として、北海道、宮城県、新潟県、東京都、山梨県、七飯町で回収された個体の放鳥地として、青森県、新潟県が記録されている.

オオジュリン

オオジュリンは Rc として回収された個体数が多いため、季節ごとの内訳について、表1に示し、図5に、Rcに関わった個体の放鳥地および回収地を示した. 七飯町で調査期間中に放鳥した本種のべ10,500羽のうち、他地域でのべ181羽が Rc として回収されており、他地域で放鳥された個体が七飯町で Rc としてのべ359羽回収された. 七飯町を秋に経由する個体も、春に経由する個体も、ともに北海

図3. a) カシラダカ, b) オオジュリン, c) アオジの月別放鳥数.
Fig. 3. Frequency distribution of captured birds in each month, a) *Emberiza rustica*, b) *E. schoeniclus*, c) *E. spodocephala*.

道内、本州、九州、一部はロシア共和国など、様々な地域で確認された。このことから、ロシア共和国や北海道内の別の場所で繁殖したオオジュリンが、秋に七飯町を經由して、日本海側、太平洋側を問わず様々な地域を經由して越冬地へと渡っていき、その越冬地の一部は国内にもあること、春にはそれらのオオジュリンが再び北上し、七飯町を經由して、より北の繁殖地へと向かうことを繰り返していることがわかった。

アオジ

アオジもカシラダカ同様、のべ放鳥数が多いにもかかわらず、Rcとしての回収記録は少ない。七飯町で放鳥された5羽のうち、3羽は放鳥地から6 kmほど離れた函館市内でのRcであり、のこり2羽はそれぞれ富山県、福井県であった。

七飯町で回収されたRcの11羽のうち、3羽は放鳥地から6 kmほど離れた函館市内で放鳥された個

図4. ツバメ（上）とショウドウツバメ（下）の月別放鳥数.

Fig. 4. Frequency distribution of the birds captured each month, above: *Hirundo rustica*, below: *Riparia riparia*.

表1. オオジュリンの回収記録.

Table 1. Summary of recovery records of *E. schoeniclus*.

a) 七飯町で放鳥したオオジュリン. Released at Nanae and recaptured at other sites.

	Released in	
	3-5月 Mar-May	9-11月 Sep-Nov
Recaptured in		
3-5月 Mar-May	0	4
9-11月 Sep-Nov	92	68
12-2月 Dec-Feb	9	8
合計 Total	101	80

b) 七飯町で回収されたオオジュリン. Released at other sites and recaptured at Nanae.

	Released in			
	3-5月 Mar-May	6-8月 Jun-Aug	9-11月 Sep-Nov	12-2月 Dec-Feb
Recaptured in				
3-5月 Mar-May	7	2	279	37
9-11月 Sep-Nov	1	1	30	2
合計 Total	8	3	309	39

図5. 七飯町で放鳥・回収されたオオジュリンの回収・放鳥地。星印は七飯町を示す。地図の表示範囲外の記録として、ロシア共和国のカムチャツカで6月に放鳥されて七飯町で10月に回収された1個体、および、七飯町で11月に放鳥されロシア共和国の沿海地方で5月に回収された1個体がある。

Fig. 5. Distribution of release or recovery sites of *E. schoeniclus* relevant to Nanai. Star shows Nanai-cho. It is included two long distance migrate records between Nanai and Russia. Both records of birds were captured during the breeding season.

体で、のこりはそれぞれ北海道の中川町、札幌市、江別市、苫小牧市、森町、厚沢部町、および山形県、新潟県で放鳥されたものだった。

ツバメとショウドウツバメ

本調査地で放鳥し、他地域でRcとして回収されたツバメは9羽のみであった。このうち1羽は放

鳥16日後に18 km離れた函館市内、1羽は放鳥2日後に48 km離れた八雲町で回収され、これらは放鳥された同じ夏の間に道南地域内で回収された記録となった。調査地で放鳥された年の越冬期に、フィリピン国内で2羽が、インドネシア国内で1羽が回収された。のこり4羽は次の繁殖期以降に別の繁殖地で回収されており、その回収地はロシア共和国プリモルスク、北海道内の天塩町、新ひだか町、七飯町の大沼公園であった。なお、本調査地で捕獲されるツバメのなかには、腹部がオレンジがかった個体(図6)が混じることがあったが、現時点では繁殖地等の詳細は不明である。

ショウドウツバメでRcに関わる記録は2羽のみであり、どちらも北海道内での記録であった。1羽は、8月に北海道の野付半島で放鳥され、その19日後に本調査地で回収されたもの、もう1羽は、本調査地で9月に放鳥され、翌年の6月に苫小牧市で回収されたものだった。

考 察

本調査地の大きな特徴は2つある。カシラダカの放鳥数が多いこと、オオジュリンの渡り個体が集中する地点であることである。

まず、カシラダカの放鳥数が多いことについて考察する。山階鳥類研究所(2002)によると、全国的には最も標識個体数が多い種はアオジである。2013年の記録によると、北海道内だけで年間1万羽以上が放鳥されており、北海道内のいずれの標識ステーションにおいても、全種を通じてアオジの放鳥数が最多である(山階鳥類研究所2015)。しかしながら、本調査地では秋の渡りにおけるアオジの放鳥数よりも、カシラダカとオオジュリンのそれが上回っていた。また、2014年には、全国で4,527羽のカシラダカが新放鳥されている(山階鳥類研究所2016)が、この年七飯町で放鳥したカシラダカは344羽で、7.6%を占める(なお、本稿には含めていないが、2015年の七飯町藤城におけるカシラダカの年間新放鳥数は769羽であった)ことから、本調査地は全国的にみてもカシラダカの放鳥数が比較的多い場所ではないかと思われる。カシラダカは、かつて松前町の林でも捕獲されていたことがあり、また秋季には数多くのカシラダカが函館市内や七飯町、北斗市の山林や公園等で目撃されることから、渡島半島内でカシラダカが通過している場所は広範囲に及ぶのかもしれない。秋に通過するそれらの群れを音声で誘引することで、本調査地で効率よく捕獲できているものと考えられる。また、本調査地は、水田地帯ではあるが、扇状地の谷部の狭まった場所に位置している。山に近いという地形的な条件が、本種の効率のよい捕獲につながっている可能性がある。

オオジュリンについては、図5で示したように、七飯町の休耕田という狭い範囲を経由した個体が秋、冬、春に、北海道より南の広範囲で、日本海側、太平洋側問わず確認された。真野ら(1994)や、山階鳥類研究所(2002)は、日本で越冬するオオジュリンには国外からの複数の渡りコースが存在し、その繁殖地も隔たっていることを示唆しており、これらの考察と本調査の結果は矛盾しない。それだけでなく、日本を通過するオオジュリンのうちの、どのくらいが七飯町を通過しているかという点は大変興味深い。たとえば、2012~2014年の期間についてみると、日本全国あわせて、回収の年平均は441羽(最少~最多:397~477羽)である(山階鳥類研究所2016)。一方、同期間内に七飯町で再捕獲されたオオジュリンは年平均47羽(最少~最多:14~80羽)である。単純には比較はできないものの、この期間については、七飯町で回収されたオオジュリンだけで全国の一割を越えており、おそらく七飯町は、日本のオオジュリンにとって、重要な通過拠点のひとつとなっていると考えられる。なお、

図 6. 七飯町藤城の休耕田で捕獲された腹部がオレンジがかったツバメ.
Fig. 6. A reddish-orange bellied *Hirundo rustica* captured at Nanae,
Hokkaido.

より詳細なオオジュリンの個体数推定および通過個体の割合については、著者らおよび仲村（未発表）の今後の課題である。

アオジの2013年5月の放鳥数は、春季の記録としては突出していた。この年は、当該地域において夏鳥の個体数が全般的に多く、アオジも大野平野の農地一帯の至るところで観察された（田中正彦 私信）。一方で、同年は高標高地では雪が融けるのが遅かったことから、それらの夏鳥が移動せずに平地に留まっており、偶然、一時的に当地に滞在していたアオジが休耕田でまともな捕獲できたという可能性が考えられる。

ツバメおよびショウドウツバメについては、北海道内やロシア共和国で繁殖する個体の一部が七飯町を通過していることがわかった。七飯で放鳥された2日後に八雲で回収された記録は、ねぐらでの捕獲ではなく、保護されたものであることから、ツバメの日中の行動範囲内での移動であると考えられる。また、腹部がオレンジがかったツバメ（図6）は、大陸系の亜種 *H. r. saturata* または *H. r. tytleri* に似ている。*H. r. saturata* は中国北東部からロシア共和国のカムチャツカなどにかけて、*H. r. tytleri* はシベリア南部、モンゴル、中国北東部の一部で繁殖する。典型的な *H. r. tytleri* に比べると、本調査地で捕獲される個体の腹部の赤みは薄く、オレンジがかった色だが、この赤みには個体変異が大きいのではないかと、という議論もある（たとえば、バードリサーチ 2012など）。現時点ではこれ以上の議論は難しいため、今後より詳しい観察や計測、情報収集を継続する必要がある。

まとめると、相当数のオオジュリンや、カシラダカ、北海道内で繁殖するツバメ、ショウドウツバメなど、高茎草地を利用する渡り性鳥類が、多種、かつ多数、七飯町の休耕田を通過することがわかった。七飯町は、渡島半島という陸域が狭くなった半島のなかにあり、湿地性の小鳥類が渡りをするための中継地として、極めて重要な地域であると考えられる。なお、本調査地の近く（1.0～1.8 km）には新幹線の新函館北斗駅が設置されて2016年3月より供用開始となり、また調査地自体も私有地の休耕田であることから、今後は環境の変化が想定される。したがって、これからは注意深いモニタリングが必要だと考えられる。

謝 辞

本研究の調査地は私有地であり、土地の所有者に厚くお礼を申し上げる。笹森聡氏からは、過去に松前町で同氏が実施したカシラダカの標識調査についての情報をいただいた。また、公益財団法人山階鳥類研究所の仲村昇氏には本稿を読んでいただいた。査読に際しては、匿名の査読者、藤巻裕蔵氏、松井晋氏、齋藤武馬氏から有益なコメントをいただいた。各氏にこの場を借りてお礼を申し上げる。

引 用 文 献

- バードリサーチ 2012. アカハラツバメについて. (オンライン) <http://ameblo.jp/tsubameblog/entry-11177052066.html> (2016年2月23日参照)
- 国土地理院 (オンライン) http://www.gsi.go.jp/kankyochiri/gm_jpn.html#gm_jpn (2016年2月20日参照)
- 真野 徹・倉橋義弘・清水敏弘・斉藤成人・大羽康利 1994. オオジュリンの愛知県への秋期の渡りルート. 日本鳥類標識協会誌 9 (1): 11-21.
- 佐藤理夫 1994a. 函館市における鳥類の渡りについて—鳥類標識調査から—. 市立函館博物館研究紀要 (4): 1-32.

- 佐藤理夫 1994b. 函館山と渡り鳥. みなみ北海道の自然誌 (自然史研究ネットワーク2000みなみ北海道編). p. 131. 幻洋社, 函館.
- 山階鳥類研究所 2002. 鳥類アトラス (鳥類回収記録解析報告書) (1961年～1995年). 環境省自然環境局野生生物課, 東京.
- 山階鳥類研究所 2009. 鳥類標識マニュアル (改訂第11版) 2008年度版. 財団法人山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階鳥類研究所 2015. 平成27年度 環境省業務委託 2013年鳥類標識調査報告書. 公益財団法人山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階鳥類研究所 2016. 平成28年度 環境省業務委託 2014年 鳥類標識調査報告書. 公益財団法人山階鳥類研究所, 我孫子.

田中正彦

〒041-1192 北海道亀田郡七飯町本町6-1-1 七飯町役場

Masahiko Tanaka

Nanae town office, 6-1-1, Honcho, Nanae, Hokkaido 041-1192, Japan

三上かつら* katsura.m.kawano@gmail.com

〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9 パー ドリサーチ

Katsura Mikami* katsura.m.kawano@gmail.com

Japan Bird Research Association, 1-29-9 Sumiyoshi, Fuchu, Tokyo 183-0034, Japan.

* 責任著者 Corresponding author

ABSTRACT

Summary of banding data of migratory wetland birds by
using fallow paddy fields in Nanae, Hokkaido, Japan

Masahiko TANAKA and Katsura MIKAMI*

We report a summary of banding data of migratory birds banded at a fallow paddy field in Nanae, Hokkaido, Japan. Between 1990 and 2014, a total of 37,868 birds from 108 different species were released from the study area. The top four species with the highest number of banded birds were Common Reed Bunting, *Emberiza schoeniclus*, the Rustic Bunting, *E. rustica*, Black-faced Bunting, *E. spodocephala*, and Barn Swallow, *Hirundo rustica*. This study site is characterized by the following two aspects: large amount of Rustic Bunting in autumn and increased recovery records of Common Reed Bunting. According to previous banding records or observations, Oshima Peninsula including Nanae-cho seems to be a big pass of Rustic Bunting in autumn. Therefore, acoustic attraction and/or geographical features of the study site would increase the likelihood of the buntings to gather at the site. Many Common Reed Buntings were captured in both autumn and spring. Of all recovery records of Common Reed Bunting of Nanae, 181 were released at other sites and later recaptured at Nanae, while 359 were released at Nanae and then recaptured at other sites. Released or recovery sites relevant to Nanae were distributed in entire Japan and a part of Russia. It means that Nanae is one of the important areas for Common Reed Bunting, which migrates in Japan, as a passing point. During the period of the study, Barn Swallow and Sand Martin, *Riparia riparia*, were using this site as a roosting site.

Key words: Banding, *Emberiza rustica*, *Emberiza schoeniclus*, Hokkaido, Nanae, Recovery

受付日：2016年3月31日，受理日：2016年8月31日

*Corresponding author: E-mail: katsura.m.kawano@gmail.com

Japan Bird Research Association, 1-29-9 Sumiyoshi, Fuchu, Tokyo 183-0034, Japan.

付表. 1990～2002, 2012～2014年における七飯町の休耕田における放鳥記録種一覧（放鳥数順）.

Appendix. List of the species of birds captured at Nanae, Hokkaido between 1990–2002 and 2012–2014.

種名 Species		のべ放鳥数 Total Number of birds
オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	10,500
カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	6,923
アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	4,247
ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	3,592
カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	2,400
ショウドウツバメ	<i>Riparia riparia</i>	1,490
コヨシキリ	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	1,433
ノゴマ	<i>Luscinia calliope</i>	1,131
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	857
スズメ	<i>Passer montanus</i>	851
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	720
ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	547
ノビタキ	<i>Saxicola torquatus</i>	445
シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	433
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	366
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	289
ベニヒワ	<i>Carduelis flammea</i>	216
ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	162
ニュウナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	138
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	130
シマセンニュウ	<i>Locustella ochotensis</i>	122
ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	74
タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	63
ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	45
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	44
コガモ	<i>Anas crecca</i>	41
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	39
オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	35
メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	32
ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	27
メボソムシクイ上種*	<i>Phylloscopus borealis</i> s.l.*	24
アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	22
カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	21
クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	21
アカゲラ	<i>Dendrocoptes major</i>	19
クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	19
ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	19
ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	18
マキノセンニュウ	<i>Locustella lanceolata</i>	18
カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	17
ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	17
イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	15
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	13
オグロシギ	<i>Limosa limosa</i>	11

上図のつづき

種名 Species		のべ放鳥数 Total Number of birds
ハシブトガラ	<i>Poecile palustris</i>	11
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	11
マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	11
シベリアジュリン	<i>Emberiza pallasi</i>	10
センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	10
ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	10
タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	8
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	7
コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	7
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	7
クイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	6
キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	6
コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	6
コノハズク	<i>Otus sunia</i>	6
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>	6
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	6
エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	5
キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	5
ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	5
コホオアカ	<i>Emberiza pusilla</i>	5
アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	4
タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>	4
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	4
アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	3
イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>	3
シマアオジ	<i>Emberiza aureola</i>	3
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	3
ヒガラ	<i>Periparus ater</i>	3
ヒバリシギ	<i>Calidris subminuta</i>	3
ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	3
アカマシコ	<i>Carpodacus erythrinus</i>	2
ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	2
オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	2
コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	2
コジュリン	<i>Emberiza yessoensis</i>	2
ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	2
ムギマキ	<i>Ficedula mugimaki</i>	2
ムジセッカ	<i>Phylloscopus fuscatus</i>	2
ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>	2
アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	1
イカル	<i>Eophona personata</i>	1
ウミウ	<i>Phalacrocorax capillatus</i>	1
エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i>	1
オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i>	1
オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i>	1

上図のつづき

種名 Species		のべ放鳥数 Total Number of birds
カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	1
キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	1
クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	1
クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	1
ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	1
コチョウゲンボウ	<i>Falco columbarius</i>	1
シロハラホオジロ	<i>Emberiza tristrami</i>	1
ツメナガホオジロ	<i>Calcarius lapponicus</i>	1
トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	1
トラフズク	<i>Asio otus</i>	1
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	1
ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	1
ハシブトオオヨシキリ	<i>Acrocephalus aedon</i>	1
マミジロ	<i>Zoothera sibirica</i>	1
マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	1
ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	1
ヤマヒバリ	<i>Prunella montanella</i>	1

* オオムシクイの可能性が高いが、ここでは種不明のメボソムシクイ上種 *Phylloscopus borealis* s.l. とした。